

みすていっく☆ばる～ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

【第5話】

～天空城～

ミスティア

「なんて……圧倒的なの……！」

ミスティアはついに最後のステージである天空城に辿りつきました。城の真下に広がるツタの足場から、宙に浮かぶ巨体を見上げて思わず声をあげます。城の外周をぐるりと取り囲む鉄条網、その内側には魔法で封じられた扉が無数に並びます。物理面でも魔法面でも鉄壁の防御態勢。無言の圧力。

ミスティア

「正面突破は難しそうね」

ツタをうまく足がかりにして天空城の本体に飛び乗り、どこかに潜り込めそうな場所はないか探します。そのまま最上部まで登ってきたところで、ちょうど下からは死角だった場所に魔法のカギが無防備に置かれているのを発見しました。カギを取ったミスティアは、鉄条網を何とか潜り抜け、入手したカギを使って、城内部の扉を次々と開けていきます。中央も間近です！

（これでクリアなんてずいぶん拍子抜け、もしかして罠？）

ミスティアの悪い予感は的中しました。

城の中心部、宝物があると予想した場所には、ごく普通のバルーンと魔法の扉があるばかり。扉を開けて進み続けると、突然青空が広がりました。城の反対側まで突き抜けてしまったのです！ 城全部が罠だったに違いありません！

オーブはいったいどこに？ 辺りを必死に探すと、天空城の更に上に、ツタの切れ端が不自然に浮かんでいるのが見つかりました。

「ぜったい怪しい……何とかつかまれば……。でも飛び移るには高さが足りない……」

飛行魔法はもちろん使えません。城の最上部に、足場を積み上げるより他に手段はなさそうです。

（お城の中にあったバルーンは足場になりそうだけど、バルーンを持ったまま鉄条網はくぐれないし……。あれ？ 良く見るとお城の真下だけ鉄条網がない……！？）

防御の隙に気づいたミスティアは、カギを巧く使って扉を消し、城の真下への通り道を作りました。ここからバルーンを次々と運び出して行きます。

みすていっく☆ばる～ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

(ふう、これくらい運び出せばいいかな。あとは足場を組み上げていけば……、ってこんなの本当に届くの?)

ミスティアの立っているツタの足場から空中城の最上部まで、その落差は優に数十メートル。巨大な城を外側から囲むような櫓の組み立ては、想像しただけで恐ろしい難題です。

(持ってきたおやつはまだ残ってるし、とにかくやってみよ……)

* * *

太陽が天の半球を下っていく間、ミスティアはひたすら足場を組み立てていました。

絡まり合うツタが邪魔をして、思うように物を運ぶことができません。そのせいで、積み上げたオブジェの順番をほんの少し入れ替えるためだけに、櫓のほとんど全部を解体して、また組み上げ直しです。正しい方向に進んでいるのか、それとも同じことを繰り返しているだけなのか、先の見えない不安と闘いながら、ミスティアは持てる知恵を総動員して作業を進めます。

そうして影がいよいよ長くなってきた頃、遂に、城の上までモノを運べるルートが完成しました。これまで挑んできたどのステージよりも、長い時間をかけ、多くの試行錯誤を重ね、高度な技術を使って組み上げた、天に届くような高さの櫓です。

城の真ん中にずっと納められていたバルーンは、構築したルートに沿って運び上げられ、城の最上部でミスティアの足場となります。そこからツタに飛び移ってみると、ツタの隙間に最後のオーブが！！

「あつた！！ 最後のオーブは……透明？」

オーブは無色透明。せっかく見つけたのに、ツタにぴったりと貼りついて剥がれません。オーブの横のタイルには文字が刻まれています。

『天が染まる時を待て』

「何だろう…？ ここで待っていればいいのか？」

* * *

みすていっく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集 ミスティア探検隊と6つのオーブ

——ここは天空城のさらに上、みすばる王国を見渡す特等席——

図書館、曠然たる十二堂、ヒンデミット伯爵邸、探検隊ギルド……。王国を一望しながら、旅の記憶に思いを馳せるミスティアでした。

明るいつけた夕空は、いつの間にか赤味が混じり、その色合いを刻々と変えていきます。雲は始めオレンジに輝き、遠く親子熊連峰が黒に染まり、地平線に迫る夕日は紫を湛え、と、そのときオーブが突然、まるで空をそのまま吸収したかのように色づきました。手を伸ばすと、今度はツタからすっと外れてミスティアの掌へ！

「これはパープルオーブ？ でも紫のオーブは前に手に入れてるし……。それに比べたらこっちは色も濃いし赤っぽいけど、レッドオーブって色じゃないし……。んー。ピンクオーブ、かな？」

【ミスティアは ピンクオーブ を手に入れた！】

ミスティア

「これで全部揃った……。で、どうなるの？」

オーブを持ったまましばらく待ってみました、何も起きる気配はありません。集めることばかりに夢中で、オーブを揃えた後のことを意識していなかったミスティアでした。夕日も沈み、辺りは急に暗くなってきました。

「ここにいてもしょうがないし、帰って王様に聞きに行こ……」

と、オーブをカバンに仕舞ったその時、カバンが輝き、一条の光を放しました！ 6つのオーブが触れあったことでオーブに秘められた魔力が解放されたのです！カバンからの光は、北の方角を指して真っすぐ伸びています。

「あっ、思いだした！！ 王様がずーっと前に、オーブを揃えたときには北へって言った！」

* * *

夜空の大きな満月を、ホウキに乗った女の子の影が横切っていきます。

カバンから放たれる光の道に沿って、王国を北へと飛んでいくミスティア。光の道は少しずつ高度を下げ、森の中の小さな空き地へ。自然の風景の中に、人工物とはっきりわかる、白い列柱のようなのが見えます。

みすていっく☆ばる〜ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

地上に降りたミスティアが近づいてみると、空から見えたのは大理石でできた台座でした。台座はミスティアの肩ほどの高さで、天面は丸く緩やかに窪んでいます。同じような台座は全部で6つ、横一列に並んでいて、台座の天面は月明りを浴びて微かに輝いています。

台座の手前の地面には、魔法文字で書かれた石版が。

『正しき名のオーブを 正しき台座に捧げよ』

ミスティア

「持つてるオーブを、この台座に置けばいいのね。王様の話がどんなだったかよく覚えてないけど、宝物でも出てくるのかな？ 順番はどうしたらいいんだろう？」

石版や台座、周りの地面も調べてみましたが、特に手がかりは見つかりません。オーブを置くと何が起きるのか、間違っても大丈夫なのか、不安が頭をよぎりましたが、オーブを置いてみたい気持ちはどんどん高まります。

「よし決めた、1回だけ試してみよう。ダメだったらお城に帰って王様に相談」

「オーブの置き方は……左の台座から、手に入れた順で……

まずは図書館でもらったブルーオーブ。

次は、お姉さんが助けてくれたシルバーオーブ。

それからギルドで旅日誌と交換したパープルオーブ。

伯爵のお屋敷で見つけたイエローオーブに、

ステージを作っていたら誰かが置いてくれてたゴールドオーブ。

最後は天空城で手に入れたピンクオーブ！」



6つのオーブを置いた瞬間、ミスティアはさっと下がって身構えました。でも何も起こりません。木の葉がこすれる小さな音が聞こえるほど、辺りは静かなままです。

「……そうよね、当たるわけないよね。全部の組み合わせっていくつあるんだろ？」

ちょうどそのとき、宮廷魔術師が運んだ王様の声が、風に乗って聞こえてきました。

「ミスティアよ、 $6 \times 5 \times 4 \times 3 \times 2$ の720通りあるのじゃぞ」

「ムリ！ 今日には帰る！」

夜空に浮かぶ満月を、さっきと同じ形の影が、今度は反対に横切っていました。

みすていっく☆ばる～ん 投稿ステージ名作集
ミスティア探検隊と6つのオーブ

これにて謎を解くカギは出揃った
ミスティアよりも先に 正しき名のオーブを 正しき台座に捧げよ

【解答は、みすばる名作集のコメント欄、もしくはメールにてお送りください】